



私の「イチオシ収穫本」

社会がリスクを分担できない 欧州大陸から見た日本の危機

日

本経済の長期停滞は、新興国の台頭やIT革命などがもたらす大きな変化に適応できなかったから、というのが通説だ。多くの経済専門家が訓練を受けるアングロサクソンの新古典派経済学は、聖域なき規制緩和で市場の機能を活性化させ、資源配分の効率化を図ることが正しい処方箋だと教える。

基本的に評者もこの立場を取るが、再検討を迫る興味深い研究が現れた。資本主義には、歴史的條件や補完的要因次第で「複数の道」が存在し、アングロサクソンのモデルが唯一最善の道ではない。本書は、比較制度学派やフランスのレギュラシオン（調整）理論の立場から日本経済を分析する。

1980年代以降の日本は、新自由主義的な政策が取られたことで、時間をかけて大きく変容したと強調する。確かに、市場外の調整手段であった系列や下請け構造、春闘による賃金決定、官僚多元主義的な所得配分や産業政策は消滅ないし大きく後退した。

著者によれば、日本は、市場の調整を主とするアングロサクソンモデルに収斂していかないから変化がないと感じるだけで、経済構造は大きく変容している。産業界で組織再編が進んだことから企業は多様化し、今では典型的な日本型企業モデルは存在しないという。

現在、自由化によって効率的手法が採用可能になった企業は、人件費を削減して短期的に利益を上げられる。だが、マクロレベルで見ると、新たな調整手段を設けずに自由化にまい進したために、制度やルールの一貫性が損なわれて停滞につながった。例えば、成長には創造的企業によるイノベーションだけでなく、先端企業から後続企業へのスピルオーバー（おこ

選・評

河野 龍太郎

BNPパリバ証券経済調査本部長

ぼれ)も不可欠だが、系列や下請けの衰退で途絶えた。

また、企業間で生産性の格差が拡大し、春闘での賃金抑制や賃金格差を正当化させた。新たに定着した正規・非正規の二重構造は、人的資本の蓄積が不十分な労働力を生むだけでなく、ワークライフバランスを悪化させ、平等で融和

的だった社会構造を大きく変えた。それが、少子化に拍車を掛けたと論じる。かつて平等主義的だった教育システムも、改革後は格差の再生産につながったと指摘する。

本書の内容全てに同意するわけではないが、ショックに対してマクロ経済が脆弱になったのは社会全体でリスク分担ができなくなったため、という主張には頷かざるを得ない。旧来システムの変容は避けられなかったと考えるが、構造改革路線を進める中で、我々はセイフティネットの拡充などにもっと配慮すべきだったのだろう。

日本資本主義の大転換

セバスチャン・ルシュヴァリエ 著
新川敏光 訳

『日本資本主義の大転換』

セバスチャン・ルシュヴァリエ 著
(岩波書店/3400円)

【名著】

日本の針路を深く考える

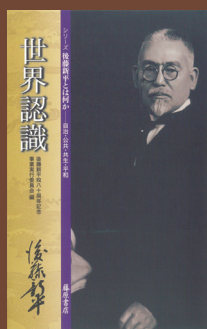
慶應義塾大学法学部教授

片山 善博

後藤新平は、台湾総督府民政長官、満鉄総裁、鉄道院総裁、外務大臣、東京市長など多彩な経歴を持ち、帝都復興院総裁として関東大震災の復旧・復興に当たった。「自治三訣」の教えや、自身の出処進退の鮮やかさでも有名である。

その後藤が、米国、ロシア、中国との共生と平和を実現すべく、方策を説いたのが本書だ。その後の日本の失敗につながる「対華21か条要求」(1915年)への批判などは敬服に値する。

当時は帝国主義全盛の時代ゆえ、今となってはにわかには肯んじない所説も散見されるが、同じく米国、ロシア、中国それに朝鮮半島との関係に悩まされることの多い今日、本書は我が国の今後の対外政策を考える上で、国民にも政治家にも学ぶべきことが多いはずである。



『世界認識
シリーズ後藤新平とは何か
自治・公共・共生・平和』

後藤新平歿八十周年記念事業実行委員会 編
(藤原書店/2010年)

味読 再読